

路上生活者の個人史

第19回

竹中尚文

川崎 等 氏(仮名)

1981 生まれ。44 歳

私は昭和 56 年生まれです。現在 44 歳です。生まれたのは京都です。両親と私と弟が 2 人と妹の 6 人家族でした。私が中学 2 年生の時に両親が離婚をしました。私たち子どもは母親に引き取られました。父親は実家に戻りました。父親は身体の調子が悪いこともあって、働けなかったのです。離婚してからも母親は内職にパートを掛け持ちして働いていました。

私が中学を卒業して、専門学校に進みました。同時にアルバイトを始めました。アルバイトをするとお金が入ってくるし、そのことが魅力的でした。いつの間にか専門学校に行かなくなっていました。母親は怒りましたよ。そんなこともあって、私は家に帰らなくなってしまう

した。少しのお金を手にして友達と遊ぶ方が楽しかったですからね。私が 20 歳になった頃、母親は妹や弟たちを連れてアパートを出て行きました。どこに行ったかも分かりませんでした。私に対しては 20 歳まで育てたのだから、この先は自分の力で生きていけということでした。

誰も居なくなったアパートに私一人が戻りました。これからどうしようかと思っているところに、たまたま父親が訪ねてきました。父親は一人になった私に自分の実家に来るようにいいました。祖父母は亡くなっていました。父親とその弟が 2 人、私からいえば叔父たちが居ました。父親と叔父の 1 人は、まったく働けなかったです。私ともう 1 人の叔父が働いて生活をしていました。そんな生活が 15 年以上も続きました。私は 30 代後

半になっていました。その頃に、働いて生活費を稼いでいた叔父が、事故で亡くなりました。最も大きな収入源が無くなったのですから、実家を売却しました。

私は父親と2人で長屋のような所に住みました。そうしている内に父親が慢性疾患で長期の入院をしました。私はアルバイトをして稼いでいましたから、独り暮らしでした。但し、家賃を滞納するようになりました。40歳の頃でした、家賃を滞納したから家主さんが督促に来ました。家賃を払えないのなら、ウチの会社で働くように言われて、そこで働くようになりました。家主さんは建設会社を営んでいました。あるとき、背中が痛くて病院に行きました。肋骨の疲労骨折だと言われました。また別の時に、熱中症になりました。医師が診断書を書いてくれて仕事を休むように言ってくれました。それを監督にいうと、

「何を甘えたことをいっている！」と言われたので、この会社を辞めようと思いました。社長に辞めたいというと、家賃を請求されました。家賃を払えないなら、部屋を明け渡すようにいわれました。ちょうどその頃に父親が亡くなりました。そして、大阪に来ました。

大阪に来て、働くこともなく路上生活をしていると、声をかけてくる人がいました。その人が住まいを用意してくれて、生活保護の申請をしてくれました。親切な人だと思っていたら、何かおかしいのです。住まいの家賃だといって、生活保護費をそのまま持って行かれるのです。こんなことやってられないと思って、また路上生活に戻りました。派遣の仕事に登録をして、あちこちで働きました。どこでもなかなか上手くいかずに、大阪に戻ってきて、また路上生活をしています。

彼は過酷な人生を歩んでいると思います。10代の頃に夢を持って生きるという経験をしなかったのでしょうか。人間が育つというのは、衣食住があればいいのではないのです。将来の展望を考えて、それを実現するように生きていくという練習を10代の頃にしておくのは大切なことだと思います。将来に対するビジョンを画くのも家庭教育の一つであるかもしれません。家庭を持たないホームレスの人たちの多くが、夢を持たないといえます。